

職業実践専門課程等の基本情報について

学校名		設置認可年月日		校長名		所在地					
東北電子専門学校		昭和51年3月31日		種田 裕一		〒 980-0013 (住所) 宮城県仙台市青葉区花京院一丁目3番1号 (電話) 022-224-6501					
設置者名		設立認可年月日		代表者名		所在地					
学校法人日本コンピュータ学園		昭和61年10月22日		持丸 寛一郎		〒 980-0013 (住所) 宮城県仙台市青葉区花京院一丁目3番1号 (電話) 022-224-6501					
分野	認定課程名		認定学科名		専門士認定年度		高度専門士認定年度		職業実践専門課程認定年度		
工業	工業専門課程		AIシステムエンジニア科		令和 4(2022)年度		-		令和 2(2020)年度		
学科の目的		AIを活用した、大規模情報システムの構築に関わるエンジニアの育成を目的とする。具体的には、AI技術の活用と、企業の情報基盤構築技術を持った人材の育成を行う。									
学科の特徴(主な教育内容、取得可能な資格 等)		主な教育内容:3年間で、AIとシステム開発の技術を習得する。AIを活用したシステム開発、大規模データベース管理、IoT・画像処理やデータベース設計・システム設計を学習する。 取得可能な資格:基本情報技術者試験、Oracle認定Javaプログラマ、Bronze SE、Javaプログラミング能力認定試験 2級、応用情報技術者試験、データベーススペシャリスト試験									
修業年限		昼夜	全課程の修了に必要な総授業時数又は総単位数		講義	演習	実習	実験	実技		
3年		昼間	※単位時間、単位いずれかに記入	単位時間 93 単位	単位時間 133 単位	単位時間 1 単位	単位時間 47 単位	単位時間 0 単位	単位時間 0 単位		
学生総定員		学生実員(A)		留学生数(学生実員の内数)(B)		留学生割合(B/A)		中退率			
120 人		64 人		4 人		6 %		9 %			
就職等の状況		■卒業者数(C) : 26 人									
		■就職希望者数(D) : 26 人									
		■就職者数(E) : 26 人									
		■地元就職者数(F) : 13 人									
		■就職率(E/D) : 100 %									
		■就職者に占める地元就職者の割合(F/E) : 50 %									
		■卒業者に占める就職者の割合(E/C) : 100 %									
		■進学者数 : 0 人									
		■その他									
		(令和 7 年度卒業者に関する令和8年5月1日時点の情報)									
第三者による学校評価		■民間の評価機関等から第三者評価: 無									
		※有の場合、例えば以下について任意記載 評価団体: 受審年月: 評価結果を掲載したホームページURL									
当該学科のホームページURL		https://tcc.ac.jp/course/ik/									
企業等と連携した実習等の実施状況(A、Bいずれかに記入)		(B: 単位数による算定)									
		総単位数					181 単位				
		うち企業等と連携した実験・実習・実技の単位数					4 単位				
		うち企業等と連携した演習の単位数					0 単位				
		うち必修単位数					93 単位				
		うち企業等と連携した必修の実験・実習・実技の単位数					4 単位				
		うち企業等と連携した必修の演習の単位数					0 単位				
		(うち企業等と連携したインターンシップの単位数)					0 単位				
教員の属性(専任教員について記入)		① 専修学校の専門課程を修了した後、学校等においてその担当する教育等に従事した者であって、当該専門課程の修業年限と当該業務に従事した期間とを通算して六年以上となる者 (専修学校設置基準第41条第1項第1号)					8 人				
		② 学士の学位を有する者等 (専修学校設置基準第41条第1項第2号)					3 人				
		③ 高等学校教諭等経験者 (専修学校設置基準第41条第1項第3号)					0 人				
		④ 修士の学位又は専門職学位 (専修学校設置基準第41条第1項第4号)					0 人				
		⑤ その他 (専修学校設置基準第41条第1項第5号)					0 人				
		計					11 人				
		上記①～⑤のうち、実務家教員(分野におけるおおむね5年以上の実務の経験を有し、かつ、高度の実務の能力を有する者を想定)の数					1 人				

1.「専攻分野に関する企業、団体等(以下「企業等」という。)との連携体制を確保して、授業科目の開設その他の教育課程の編成を行っていること。」関係

(1)教育課程の編成(授業科目の開設や授業内容・方法の改善・工夫等を含む。)における企業等との連携に関する基本方針
本科の教育課程の編成においては、システム開発について知見のある企業、業界団体などが委員として参画する「教育課程編成委員会(IT分野)」を設置し、職業に必要な実践的かつ専門的な能力を育成するための教育課程の編成について組織的に取り組み、実践的職業教育の質を確保する。
委員会では、業界の人材の専門性に関する動向、地域の産業振興の方向性、今後必要となる知識や技術などを分析し、実践的職業教育に必要な授業科目の開設や授業方法の改善の提案を行い、企業等の要請を十分に生かした教育課程の編成に資する。

(2)教育課程編成委員会等の位置付け

本科では、次の過程を経て教育課程を編成、決定する。

1. 本科教員により、次年度教育課程について検討、改善案を作成する。
2. 「教育課程編成委員会(IT分野)」(年に2回以上開催)において、現行教育課程及び本科からの改善案について、専門的、実践的な見地から検討し、次年度教育課程に必要な授業科目の開設や授業方法の改善等の提案を行う。
3. 校長、教務部長、教務課長により編成される学内カリキュラム委員会において、2. で提案された内容を含めて総合的に検討し、次年度教育課程を決定する。

(3)教育課程編成委員会等の全委員の名簿

令和8年4月1日現在

名 前	所 属	任期	種別
山口 和彦	一般社団法人宮城県情報サービス産業協会	令和7年4月1日～令和9年3月31日(2年)	①
西城 健二	株式会社ビッツ	令和7年4月1日～令和9年3月31日(2年)	③
熊谷 健児	株式会社ジャステック	令和7年4月1日～令和9年3月31日(2年)	③
松浦 洋介	KDDIアジャイル開発センター株式会社	令和8年4月1日～令和10年3月31日(2年)	③
北原 央崇	ISTソフトウェア株式会社	令和8年4月1日～令和10年3月31日(2年)	③
種田 裕一	東北電子専門学校 校長	令和7年4月1日～令和9年3月31日(2年)	
吉澤 毅	東北電子専門学校 教務部長(委員長)	令和7年4月1日～令和9年3月31日(2年)	
川名 拳也	東北電子専門学校 教務主任(副委員長)	令和7年4月1日～令和9年3月31日(2年)	
遠藤 公基	東北電子専門学校 学科主任	令和7年4月1日～令和9年3月31日(2年)	
坂井 芳孝	東北電子専門学校 学科主任	令和8年4月1日～令和10年3月31日(1年)	

※委員の種別の欄には、委員の種別のうち以下の①～③のいずれに該当するか記載すること。

- ①業界全体の動向や地域の産業振興に関する知見を有する業界団体、職能団体、地方公共団体等の役職員(1企業や関係施設の役職員は該当しません。)
- ②学会や学術機関等の有識者
- ③実務に関する知識、技術、技能について知見を有する企業や関係施設の役職員

(4)教育課程編成委員会等の年間開催数及び開催時期

開催数: 年2回開催 開催時期: 毎年9月及び1月

(開催日時)

第1回 令和7年9月10日 17:00～18:02

第2回 令和8年2月12日 17:00～18:03

(5)教育課程の編成への教育課程編成委員会等の意見の活用状況

令和7年度の教育課程編成委員会で、システム開発における生成AIの活用状況を確認した。

生成AIを利用することは増えており、特に下流工程のコーディング、単体テスト、基本設計などがAI化する方に舵を切る雰囲気が強い。ただし、AIの正しさが担保されないこと、生成AIに依存した状態ではAIが使えない現場で業務が進められるかなどの不安はあるとの意見を頂戴した。

学科の授業では、デザインの要素を追求することはしていないので、特にユーザインタフェースとなる画面デザインやコーディングに生成AIを活用する。

具体的には、2年生の「Web開発技術」、3年生の「AI応用開発」の中で、IDEのエージェントを利用して作成させる。また、十分なテストケースを用意することで、AIエージェントの利用が正確であるかの検証を行う。

2.「企業等と連携して、実習、実技、実験又は演習（以下「実習・演習等」という。）の授業を行っていること。」関係

(1) 実習・演習等における企業等との連携に関する基本方針

実践的かつ専門的な能力を育成するために、企業等と組織的な連携を取った実習が重要と考えている。連携するにあたっては、知識・技術の学修に加えて、実務を遂行するに必要なヒューマンスキルや仕事に対する意識・姿勢への「気づき」を得ることも重視する。
また、企業の選定にあたっては、実践的なアドバイスを受けて必要なスキルが修得できるように、情報システムに関する経験豊富な企業、特に、大規模システムの開発経験が豊富で、本校の卒業生が在籍活躍していることを要件とする。

(2) 実習・演習等における企業等との連携内容

株式会社プロトソリューションと取り交わした「職業教育協定書」（以下、協定書）に基づいて「システム開発技術」「AI応用開発」の授業科目を連携して実施している。具体的には、協定書別紙に記載している以下の内容を企業と連携し実施した。

「システム開発技術」

株式会社プロトソリューションには、システム開発の上流工程で行われる要件定義に求められる考え方や作業手順を学ぶことを目的に、実践的な演習を依頼した。

「AI応用開発」

株式会社プロトソリューションには、IT業界のトレンド技術や今後業務で経験する開発工程を学ぶこと、プロのエンジニアに求められる能力を知ること、開発した成果物へのフィードバックを基に企業で求められる品質を確認する事を目的に実践的な演習を依頼した。

科目担当教員と企業の講師がそれぞれ事前に打ち合わせを行い、連携実習開始時点までの学習内容を説明後、実習内容、実習成果物に対する評価基準などについて定めた。

実習はチームを編成して行い、企業の講師がシステムエンジニアとしての心得、求められるスキルなどを理解させ、チームで取り組むプロジェクトの目標、開発手順などを指示する。実習最終日にはプロジェクト成果物を提出させ、実習ごとに講師が評価を行った。

その後の授業においては、科目担当教員が実習内容の補足や、プロジェクト成果物の改良に向けたサポートを行い、期末には、それぞれの企業の講師の評価を踏まえ、担当教員が総合的に成績評価・単位認定を行った。

(3) 具体的な連携の例※科目数については代表的な5科目について記載。

科 目 名	企業連携の方法	科 目 概 要	連 携 企 業 等
システム開発技術	【校内】企業等からの講師が全ての授業を主担当	システム開発に求められる考え方や作業を理解することを目的として、要件定義の考え方やドキュメント作成について学ぶ	株式会社プロトソリューション
AI応用開発	【校内】企業等からの講師が全ての授業を主担当	開発手法やツールの利用、情報システム開発全体に関わること、企業で求められる品質を確認する事を目的に演習を行う	株式会社プロトソリューション

3.「企業等と連携して、教員に対し、専攻分野における実務に関する研修を組織的に行っていること。」関係

(1) 推薦学科の教員に対する研修・研究(以下「研修等」という。)の基本方針

学校は、教員に対する研修の必要性を把握し、その必要性に応じて研修計画を策定し、計画に基づいて研修を実施する。その内容として、専攻分野の実務に関する知識や技術及び授業や生徒に対する指導力等を修得させ、教員の能力及び資質等の向上を図る。必要な場合は、他の機関や企業等と共同して又は外部の機関に委託して研修を行うことがある。

これらについては、「学校法人日本コンピュータ学園 教員研修規定」に定めており、この規定に基づいて研修を実施している。

(2) 研修等の実績

① 専攻分野における実務に関する研修等

gacco オンライン講座「AI・データサイエンス基礎講座」

内容:

- ① データとモデリングの基礎
- ② 人工知能のための数学の使い方
- ③ 人工知能のための確率・統計の使い方
- ④ 機械学習と深層学習の基礎
- ⑤ コンピューティング

連携: AIにおけるデータの重要性への理解を深めるとともに、AIで用いるアルゴリズムの理解に必要な数学・確率・統計の基礎を学習し、AI技術の核にあたる深層学習(ディープラーニング)の基礎と、プログラミングの方法も学習する。

対象: 学科教員

日時: 令和6年7月28日

講師: 千葉商科大 寺野隆雄氏、東京都市大学 大谷紀子氏、早稲田大学 松山泰男氏、名古屋市立大学 金子格氏

② 指導力の修得・向上のための研修等

「心理面に着眼した学生指導のポイント」に関する研修1

内容:

- ① 学生指導の心得
- ② 学生と教員の信頼関係を築くためのポイント
- ③ 孤立する学生への対応方法
- ④ 学習意欲を高める工夫
- ⑤ 学生を理解する力をつけるポイント
- ⑥ グループワーク実践演習

連携: 出来るだけ多くの学生が進級、卒業できるようにするためのかわり方を考える、東北電子専門学校の教職員向けのオリジナル研修。

対象: 学科教員

日時: 令和7年4月3日

講師: 独立行政法人 労働者健康安全機構 今村 泰章 氏

「学生とのコミュニケーションの取り方」に関する研修2

内容:

- ① スクールカウンセラー主催グループワーク授業の振り返り
- ② クラス運営・クラス経営の重要性
- ③ アンガーマネジメント講習

連携: メンタルの問題を抱える学生が増えている現状を踏まえて、教員と学生との信頼関係を構築し、どのようにして活気ある教育効果の出るクラス運営を行っていくかを学ぶ研修を行う。

対象: 学科教員

日時: 令和7年8月20日

講師: 独立行政法人 労働者健康安全機構 今村 泰章 氏

(3) 研修等の計画

① 専攻分野における実務に関する研修等

「AI・データサイエンス概論」

内容:

- ① プロジェクトリーダーとして知っておくべきAI構築の基礎
- ② 時系列・テキストを扱う人工知能技術
- ③ 画像・映像・3次元データを扱うAIの導入
- ④ ロボティクスとAIの導入
- ⑤ 社会的データとAI

連携: AIの実装はいくつかの関連したAIを複合的に扱うため、プロジェクトの企画・推進には横断的な知識が求められる。そこで、主要な手法・技術・理論の基礎を幅広く学習し、AIを活用するための全体像と、基礎知識を習得する。

対象: 学科教員

日時: 令和8年7月1日～8月31日(ビデオオンデマンド)

講師: FiNC Technologies 南野充則氏、早稲田大学 速水悟氏、ACES 田村浩一郎氏、早稲田大学 尾形哲也氏、産業技術総合研究所 本村陽一氏

② 指導力の修得・向上のための研修等

「心理面に着眼した学生指導のポイント」に関する研修2

内容:

令和7年度のカウンセリング・学生グループワーク授業を踏まえて昨年度の研修の振り返りと本校学生の傾向を加味した研修

- ① 学生指導の心得
- ② 学生と教員の信頼関係を築くためのポイント
- ③ 孤立する学生への対応方法
- ④ 学習意欲を高める工夫
- ⑤ 学生を理解する力をつけるポイント
- ⑥ グループワーク実践演習

連携: 出来るだけ多くの学生が進級、卒業できるようにするためのかわり方を考える、東北電子専門学校の教職員向けのオリジナル研修。

対象: 学科教員

日時: 令和8年4月6日

講師: 独立行政法人 労働者健康安全機構 今村 泰章 氏

4.「学校教育法施行規則第189条において準用する同規則第67条に定める評価を行い、その結果を公表していること。また、評価を行うに当たっては、当該専修学校の関係者として企業等の役員又は職員を参画させていること。」関係

(1) 学校関係者評価の基本方針

毎年実施している自己評価の評価結果について、客観性・透明性を高めるとともに、関係業界との連携協力による学校運営の改善を図るため、卒業生及び職業実践専門課程として推薦する学科(以下、「当該学科」という。)の専攻分野に関する業界関係者等を委員とする『学校関係者評価委員会』(以下、「委員会」という。)を設置し、学校関係者評価を行うものとする。

委員会は、学校の重点目標、計画、自己評価等について評価し、特に当該学科については、その教育目標、育成人材像、教育課程の編成、キャリア教育、資格取得の指導体制等について重点的に評価を行うとともに、その評価結果や今後の改善方策についてとりまとめ、広く公表する。

学校は、これを自己評価結果とともにその後の改善方策の検討において活用し、教育活動及びその他の学校運営の継続的な改善を行い、専修学校教育の目的に沿った質の保証・向上に資するものとする。

(2)「専修学校における学校評価ガイドライン」の項目との対応

ガイドラインの評価項目	学校が設定する評価項目
(1) 教育理念・目的	a. 理念・目的・育成人材像は定められているか(専門分野の特性が明確になっているか) b. 学校における職業教育の特色を示しているか c. 社会経済のニーズ等を踏まえた学校の将来構想を抱いているか d. 理念・目的・育成人材像・特色・将来構想などが生徒・保護者等に周知されているか e. 各学科の教育目標、育成人材像は、学科等に対応する業界のニーズに向けて方向づけられているか
(2) 学校運営	a. 目的等に沿った運営方針が策定されているか b. 事業計画に沿った運営方針が策定されているか c. 運営組織や意思決定機能は、明確化され、有効に機能しているか d. 人事、給与に関する制度は整備されているか e. 各部門の組織整備など意思決定システムは整備されているか f. 業界や地域社会等に対するコンプライアンス体制が整備されているか g. 教育活動に関する情報公開が適切になされているか h. 情報システム化等による業務の効率化が図られているか
(3) 教育活動	a. 教育理念等に沿った教育課程の編成・実施方針等が策定されているか b. 教育理念、育成人材像や業界のニーズを踏まえた教育機関としての修業年限に対応した教育到達レベルや学習時間の確保は明確にされているか c. 学科等のカリキュラムは体系的に編成されているか d. キャリア教育・実践的な職業教育の視点に立ったカリキュラムや教育方法の工夫・開発などが実施されているか e. 関連分野の企業・関係施設等、業界団体等との連携により、カリキュラムの作成・見直し等が行われているか f. 関連分野における実践的な職業教育(産学連携によるインターンシップ、実技・実習等)が体系的に位置づけられているか g. 企業や専門家の意見、評価を受け、より実践的な能力を修得する機会が整備されているか h. 授業評価の実施・評価体制はあるか i. 成績評価・単位認定の基準は明確になっているか j. 資格取得の指導体制、カリキュラムの中での体系的な位置づけはあるか k. 必要場合は業界と連携して、人材育成目標に向け授業を行うことができる要件を備えた教員を確保しているか l. 関連分野における先端的な知識・技能等の修得や指導力の育成など、教員の資質向上のために研修等の取組が行われているか m. 職員の能力開発のための研修等が行われているか

(4) 学修成果	a. 就職率の向上が図られているか b. 資格取得率の向上が図られているか c. 退学率の低減が図られているか d. 卒業生・在校生の社会的な活躍及び評価を把握しているか e. 卒業後のキャリア形成への効果を把握し学校の教育活動の改善に活用されているか
(5) 学生支援	a. 進路・就職に関する支援体制は整備されているか b. 学生相談に関する体制は整備されているか c. 学生の経済的側面に対する支援体制は整備されているか d. 学生の健康管理を担う組織体制はあるか e. 課外活動に対する支援体制は整備されているか f. 学生の生活環境への支援は行われているか g. 保護者と適切に連携しているか h. 卒業生への支援体制はあるか i. 社会人のニーズを踏まえた教育環境が整備されているか j. 高校・高等専修学校等との連携によるキャリア教育・職業教育の取組が行われているか
(6) 教育環境	a. 施設・設備は、教育上の必要性に十分対応できるよう整備されているか b. 学内外の実習施設、インターンシップ等について十分な教育体制を整備しているか c. 学生が自主的に学修するための環境が整備されているか d. 防災、防犯に対する安全管理体制は整備されているか
(7) 学生の受入れ募集	a. 学生募集活動は、適正に行われているか b. 学生募集活動において、教育成果は正確に伝えられているか c. 学納金は妥当なものとなっているか
(8) 財務	a. 中長期的に学校の財務基盤は安定しているといえるか b. 予算・収支計画は有効かつ妥当なものとなっているか c. 財務について会計監査が適正に行われているか d. 財務情報公開の体制整備はできているか
(9) 法令等の遵守	a. 法令、専修学校設置基準等の遵守と適正な運営がなされているか b. 個人情報に関し、その保護のための対策がとられているか c. 自己評価の実施と問題点の改善に努めているか d. 自己評価結果を公開しているか
(10) 社会貢献・地域貢献	a. 学校の教育資源や施設を活用した社会貢献・地域貢献を行っているか b. 生徒のボランティア活動を奨励、支援しているか c. 地域に対する公開講座・教育訓練（公共職業訓練等を含む）の受託等を積極的に実施しているか
(11) 国際交流	a. 留学生の受入れ・派遣について戦略を持って国際交流を行っているか b. 受入れ・派遣、在籍管理等において適切な手続き等がとられているか c. 学修成果が国内外で評価される取組を行っているか d. 学内で適切な体制が整備されているか

※(10)及び(11)については任意記載。

(3) 学校関係者評価結果の活用状況

委員会において職業教育のマネジメントについて議論があり、高校生の進学に際して「3つのポリシー」を重視することの重要性が言及された。高校生や保護者、高校教員が進学先の教育方針や求める人材像をより知りたいと考えているため、これをよりオープンにする必要があるとの提案があり、これを受けて、学校ホームページの構成を見直し、「3つのポリシー」にアクセスしやすくする工夫を加えた。また、「3つのポリシー」は教育の質向上のため、PDCAサイクルを用いて継続的に改善していくことが重要であるとの認識が共有された。

また、退学率の低減についての議論では、学校として課題や要因を把握することが重要であるとの指摘を受けた。これに基づき、退学率低減に向けた取り組みを強化するため、スクールカウンセリングの強化や学生への適切な支援方法に関する教員研修やフォローアップを行うこととした。早期に問題点を発見し、担任だけでなく学生相談員やカウンセラーなど複数の関係者が関与する対応を行うことで、退学者の減少を目指す。

(4) 学校関係者評価委員会の全委員の名簿

令和8年4月1日現在

名 前	所 属	任 期	種 別
及川 芳幸	株式会社 クリエイティブスタッフ	令和8年4月1日～令和10年3月31日(2年)	企業等委員
近江 暢道	株式会社 アルゴグラフィックス	令和8年4月1日～令和10年3月31日(2年)	企業等委員
小澤 賢侍	公益財団法人 画像情報教育振興協会	令和8年4月1日～令和9年3月31日(1年)	業界団体
笠松 博	宮城県産業技術総合センター	令和8年4月1日～令和9年3月31日(1年)	企業等委員
川島 健太郎	株式会社 ヒノタマ	令和7年4月1日～令和9年3月31日(2年)	企業等委員
菊田 正信	卒業生	令和7年4月1日～令和9年3月31日(2年)	卒業生
岸浪 行雄	株式会社 東北共立	令和7年4月1日～令和9年3月31日(2年)	企業等委員
近藤 大輔	リコージャパン 株式会社	令和8年4月1日～令和10年3月31日(2年)	企業等委員
佐藤 富士夫	宮城県電気工事工業組合	令和8年4月1日～令和10年3月31日(2年)	業界団体
庄司 直人	株式会社 リード・サイン	令和8年4月1日～令和10年3月31日(2年)	企業等委員
鈴木 一徳	スズキハイテック株式会社	令和7年4月1日～令和9年3月31日(2年)	企業等委員
玉川 陽児	株式会社 サンフィールドクリエーション	令和8年4月1日～令和10年3月31日(2年)	企業等委員
千葉 清純	一般社団法人 宮城県建築士事務所協会	令和8年4月1日～令和10年3月31日(2年)	業界団体
角田 透	株式会社 JC-21教育センター	令和7年4月1日～令和9年3月31日(2年)	企業等委員

(5) 学校関係者評価結果の公表方法・公表時期

公開方法: ホームページで公開

<https://tcc.ac.jp/publish/school-evaluation/>

公表時期: 毎年7月中旬に更新

5.「企業等との連携及び協力の推進に資するため、企業等に対し、当該専修学校の教育活動その他の学校運営の状況に関する情報を提供していること。」関係

(1) 企業等の学校関係者に対する情報提供の基本方針

本校は、学校教育法、私立学校法で定められた目的を実現するための教育機関として、教育活動の活性化や学校運営の円滑化を図るとともに、企業等との繋がりを強め、連携推進に資するために情報公開を行う。

提供する情報は、学生及び保護者、入学希望者、企業関係者等に対して、学校の教育目標・教育活動の実績・キャリア教育等の教育基礎情報を始め、学校評価等の学校全体の状況に関することとする。

なお、提供に当たっては、個人情報の取扱いに留意するとともに公正な情報の表示に努めるものとする。

(2)「専門学校における情報提供等への取組に関するガイドライン」の項目との対応

ガイドラインの項目	学校が設定する項目
(1) 学校の概要、目標及び計画	設置者名、学校名、所在地、連絡先、理事長名、校長名、教職員数、学生数、教育理念、事業計画、学校の特色、沿革
(2) 各学科等の教育	修業年限、募集定員、学科案内(学科の特色、取得を目指す資格、職種、学びのステップ)、カリキュラム、入学者数、資格取得実績、卒業者の進路
(3) 教職員	教職員数、教員組織・担当科目
(4) キャリア教育・実践的職業教育	就職指導、就職支援プログラム、各種連携・連携教育
(5) 様々な教育活動・教育環境	学校行事、クラブ活動、教育施設・設備(校舎概要、主な施設・設備の特色、主な実習設備、その他施設・設備)
(6) 学生の生活支援	学生支援体制、学生寮
(7) 学生納付金・修学支援	初年度学費一覧、入学手続き金の分割納入について、授業料等の分割納入について、学費サポート制度(特別奨学金制度、試験特待生制度、資格特待生制度、親族入学優遇制度、日本学生支援機構奨学金、国の教育ローン、新聞奨学生制度、教育ローン)
(8) 学校の財務	財務情報(資金収支計算書、事業活動収支計算書、貸借対照表)
(9) 学校評価	学校評価、自己評価、学校関係者評価、職業実践専門課程の基本情報
(10) 国際連携の状況	留学生対象学科:国際ビジネス科の特徴、取得を目指す資格
(11) その他	

※(10)及び(11)については任意記載。

(3) 情報提供方法

ホームページ、広報誌等の刊行物、卒業制作展等学校・学科が主催するイベントで情報提供

<https://tcc.ac.jp/publish/>

授業科目等の概要

(工業専門課程 A I システムエンジニア科) 令和 8 年度																
	分類			授業科目名	授業科目概要	配当 年次・学期	授 業 時 数	単 位 数	授業方法			場所		教員		企業等との連携
	必修	選択必修	自由選択						講義	演習	実験・実習・実技	校内	校外	専任	兼任	
1	○			就職対策 I A	一般常識や、適性試験対策として言語分野（国語）や非言語分野（数学）の基礎を学習する。	1 前		2	○			○		○		
1	○			就職対策 I B	適性試験対策として、模擬テストなどを通じて、言語分野（国語）や非言語分野（数学）を学習する。また、自己分析により適職を知り、その上で就活時に必要となるエントリーシートや履歴書の書き方を学ぶ。	1 後		2	○			○		○		
2	○			ハードウェア概論 A	コンピュータの動作原理やデータ表現・情報の基礎理論・ハードウェアの基礎理論・インタフェース・技術動向などを学ぶ。	1 前		6	○			○		○		
2	○			ハードウェア概論 B	基本情報技術者試験の科目 A で出題される、ハードウェア分野の問題を解くための知識を身に付け、その解法を学ぶ。	1 後		3	○			○		○		
3	○			ネットワーク技術基礎 A	ネットワークの役割や基礎知識、ローカルエリアネットワーク・通信規約・通信機器・セキュリティの基礎知識・関連法規などを学ぶ。	1 前		4	○			○		○		
3	○			ネットワーク技術基礎 B	基本情報技術者試験の科目 A で出題される、ネットワーク分野やセキュリティ分野の問題を解くための知識を身に付け、その解法を学ぶ。	1 後		1	○			○		○		
4	○			データベース技術基礎 A	データベースの基礎理論やデータベース管理システムの役割・障害対策・SQLなどの基礎知識を学ぶ。	1 前		2	○			○		○		
4	○			データベース技術基礎 B	基本情報技術者試験の科目 A で出題される、データベース分野の問題を解くための知識を身に付け、その解法を学ぶ。	1 後		1	○			○		○		
5	○			プログラミング言語基礎 A	プログラムの処理手順を表現する流れ図や、基本情報技術者試験で出題される擬似言語やデータ構造について学ぶ。また、それらをプログラミング言語で実装する方法の基礎を学ぶ。	1 前		4	△		○	○		○		
6	○			プログラミング言語基礎 B	基本情報技術者試験で取り上げられる代表的なアルゴリズムについて学び、それらをプログラミング言語で実装する方法を身に付ける。	1 後		3	△		○	○		○		
7	○			システム開発概論 A	システム開発の工程や各工程での作業内容、システム開発技法、各種設計書（ドキュメント）、テスト技法に関する基礎知識と、OSの機能概要やソフトウェアに関する基礎知識を学ぶ。	1 前		4	○			○		○		

7	○		システム開発概論B	基本情報技術者試験の科目Aで出題される、システム開発分野の問題を解くための知識を身に付け、その解法を学ぶ。	1後		1	○		○		○							
8	○		情報化の基礎A	経営戦略・企業関連法規・経営科学・プロジェクトマネジメント・システム監査など、企業活動に必要な基礎知識を幅広く学ぶ。	1前		4	○		○		○							
8	○		情報化の基礎B	基本情報技術者試験の科目Aで出題される、マネジメント分野やストラテジ分野の問題を解くための知識を身に付け、その解法を学ぶ。	1後		1	○		○		○							
9	○		情報リテラシー	パソコンの基本操作からOfficeソフトの活用方法、ネット社会におけるモラルやセキュリティについて学ぶ。	1前		1	△		○	○		○						
10	○		情報処理技術者試験対策I	基本情報技術者試験などのIT系資格検定試験に出題される問題に関する知識、解法を身に付けるために、1年次に学んだ科目を横断的に学ぶ。	1後		5	○		○							○		
11	○		AI概論	人工知能(AI)について、概要・歴史などの基礎知識について学ぶ。また、機械学習やディープラーニングの概要・人工知能の応用範囲などについて、最新の技術動向も踏まえて学習する。	1後		4	○		△	○		○						
12	○		プログラミング言語I	Java言語の基本を学ぶ。	1後		3	△		○	○		○						
13	○		就職対策IIA	一般常識や適性試験対策学習を継続しながら、自己分析と業界研究を行い、就職活動の準備を整える。	2前		2	○		○		○							
13	○		就職対策IIB	一般常識や適性試験対策学習を継続しながら、エントリーシートや履歴書を完成させ、就職活動の準備を整える。	2後		2	○		○		○							
15	○		SQLA	Oracleデータベースを使って、データベース操作の基本を学ぶ。Oracle Master Bronzeの試験範囲をカバーする。	2前		4	○		△	○						○		
15	○		SQLB	Oracleデータベースを使って、データベース管理の基本を学ぶ。Oracle Master Bronzeの試験範囲をカバーする。	2後		4	○		△	○						○		
14	○		プログラミング言語IIA	Java言語でのプログラミングを学習し、Javaプログラミング能力認定試験合格を目指す。	2前		4	○		△	○						○		
14	○		プログラミング言語IIB	Java言語でのプログラミングを学習し、Java SE認定資格試験合格を目指す。	2後		10	○		△	○						○		
17	○		AIモデル開発	AIのアルゴリズムを学ぶ。AIツールを使用して、機械学習するモデルを開発する。また、正しいモデルを作成するためのデータ前処理についても学ぶ。	2前		4	○		△	○		○						
16	○		AIシステムA	pythonをベースにAIを活用したプログラミングを学ぶ。	2前		2			○	○		○						

16	○		A I システム B	pythonをベースにAIを活用したプログラミングを学ぶ。	2 後		2			○	○		○		
19	○		システム開発技術	情報システムの開発を行う上で必要な知識を学習する。ドキュメントなどの成果物を作成し、レビューを行う。Gitなどのソース管理に関しても学ぶ。	2 前		2			○	○		△	○	○
18	○		企業会計とビジネス	企業の情報システム構築に必要な、経営と会計の基礎、および企業の仕組みを学ぶ。	2 前		2	○		○		○			
20	○		Web 開発技術	Web上で動く情報システムの基本的な構築と、簡単なWebシステムについて学ぶ。WebAPI等で利用される、JSONなどのファイルフォーマットについても学習する。WebAPIの作成について学び、簡単なWebAPIを開発する。	2 後		4	○		△	○		○		
21	○		就職対策Ⅲ	受験企業の研究、時事問題対策、面接訓練など、より実践的な就職活動のトレーニングを行う。	3 前		4	○		○		○			
22	○		プレゼンテーション	プレゼンテーションを学ぶ。また、PowerPointなど資料作成ツールの操作を学ぶ。	3 前		2			○	○			○	
23	○		卒業研究 A	進捗報告・進捗管理・工程管理など、チーム作業に関連する手法などを学ぶ。また、発表用ムービーファイルの簡単な編集について学ぶ。	3 前		1			○	○		○		
23	○		卒業研究 B	総合実習として、学んできた言語・開発技法・ツールを活用し、グループでシステムを構築する。	3 後		8	△		○	○		○		
25	○		A I 応用開発 A	クラウドAIサービスなどのAIの機能について学習する。AIサービスを既存のアプリケーションに組み込む方法を学び、プログラムを作成する。	3 前		4	△		○	○		△	○	
25	○		A I 応用開発 B	WebベースのITシステムの中に、高度なAIサービスを組み込み、実用的なAI活用システムを開発する。	3 後		2			○	○		△	○	○
24	○		プログラミング言語Ⅲ	C#を学び、C#を使ったGUIプログラムなどを作成する。	3 後		1			○	○		○		
26	○		データ収集と分析	BIツールの操作を学び、データベースやIoTデータを分析する。集計データの表示やグラフ化の方法など、効果的なデータ表現についても学習する。	3 後		1			○	○			○	
27		○	情報セキュリティマネジメント試験対策Ⅱ A	対策クラスを編成し、情報セキュリティマネジメント試験の範囲を学習する。対策期間中に適宜模擬試験を実施し、実力の確認と養成を行う。	2 前		4	○		○		○			
28		○	基本情報技術者試験対策Ⅱ A	対策クラスを編成し、基本情報技術者試験の範囲を学習する。対策期間中に適宜模擬試験を実施し、実力の確認と養成を行う。	2 前		4	○		○		○			
29		○	応用情報技術者試験対策Ⅱ A	対策クラスを編成し、応用情報技術者試験の範囲を学習する。対策期間中に適宜模擬試験を実施し、実力の確認と養成を行う。	2 前		4	○		○		○			

30		○	高度情報技術者試験対策ⅡA	対策クラスを試験区分ごとに編成し、高度情報技術者試験の範囲を学習する。対策期間中に適宜模擬試験を実施し、実力の確認と養成を行う。	2前		4	○			○		○							
31		○	情報セキュリティマネジメント試験対策ⅡB	対策クラスを編成し、情報セキュリティマネジメント試験の範囲を学習する。対策期間中に適宜模擬試験を実施し、実力の確認と養成を行う。	2後		4	○			○		○							
32		○	基本情報技術者試験対策ⅡB	対策クラスを編成し、基本情報技術者試験の範囲を学習する。対策期間中に適宜模擬試験を実施し、実力の確認と養成を行う。	2後		4	○			○		○							
33		○	応用情報技術者試験対策ⅡB	対策クラスを編成し、応用情報技術者試験の範囲を学習する。対策期間中に適宜模擬試験を実施し、実力の確認と養成を行う。	2後		4	○			○		○							
34		○	高度情報技術者試験対策ⅡB	対策クラスを試験区分ごとに編成し、高度情報技術者試験の範囲を学習する。対策期間中に適宜模擬試験を実施し、実力の確認と養成を行う。	2後		4	○			○		○							
35		○	情報セキュリティマネジメント試験対策Ⅲ	対策クラスを編成し、情報セキュリティマネジメント試験の範囲を学習する。対策期間中に適宜模擬試験を実施し、実力の確認と養成を行う。	3前		4	○			○		○							
36		○	基本情報技術者試験対策Ⅲ	対策クラスを編成し、基本情報技術者試験の範囲を学習する。対策期間中に適宜模擬試験を実施し、実力の確認と養成を行う。	3前		4	○			○		○							
37		○	応用情報技術者試験対策Ⅲ	対策クラスを編成し、応用情報技術者試験の範囲を学習する。対策期間中に適宜模擬試験を実施し、実力の確認と養成を行う。	3前		4	○			○		○							
38		○	高度情報技術者試験対策Ⅲ	対策クラスを試験区分ごとに編成し、高度情報技術者試験の範囲を学習する。対策期間中に適宜模擬試験を実施し、実力の確認と養成を行う。	3前		4	○			○		○							
39		○	A I 画像処理	デジタル化された画像データのモデル化やデータ解析によるパターン認識などの方法を学ぶ。より深くAIを学習する。	3前		2	○			○		○							
39		○	I o T 技術A	IoTシステムの概要、センサーやアクチュエーターについて学ぶ。より深くAIを学習する。	3前		2				○	○					○			
40		○	I o T 技術B	IoTエッジデバイスとIoTサーバーの連携について学ぶ。より深くAIを学習する。	3後		2				○	○					○			
41		○	データベース設計	データベースの考え方、設計に必要な考え方を学び、データベースを設計する。より深くシステム開発を学習する。	3前		2	○			△	○		○						
41		○	システム設計技術A	業務システムの設計、開発、テストまで一通りの開発工程を学ぶ。より深くシステム開発を学習する。	3前		2	△			○	○		○						
42		○	システム設計技術B	業務システムの分析から設計、開発、テストまで一通りの開発を行う。より深くシステム開発を学習する。	3後		2	△			○	○		○						

43			○	ボランティア活動	校内外におけるボランティア活動を行う。	1 後 2 後 3 後		1	△		○	△	○	○			
44			○	CGアプリケーション入門	3次元CGの初歩的な制作方法を実習を中心に学ぶ。	1 後 2 後 3 後		1	△		○	○		○			
45			○	英会話基礎	日常英会話の基礎を学ぶ。	1 後 2 後 3 後		1	○			○				○	
46			○	コミュニケーションスキル講座	円滑な対人関係、組織の活性化、および、良いコミュニケーションに必要な「話す」「聞く」といった知識と能力を身につける。	1 後 2 後 3 後		1	△		○	○				○	
47			○	就職作文対策	就職試験で出題されることが多い作文について、基礎的な書き方やコツなどを学ぶ。	1 後 2 後 3 後		1		○		○				○	
48			○	経営とビジネス	技術者にも必要な会社における会計の基本と経営との関係について学ぶ。	1 後 2 後 3 後		1	○			○				○	
49			○	実践カラーコーディネート	配色調和、色彩心理などカラーコーディネート知識を基に、対象別の実践的配色技法を学ぶ。	1 後 2 後 3 後		1	○		△	○				○	
合計					A I 専攻 4 4 科目 システム開発専攻 4 4 科目	93単位											

卒業要件及び履修方法		授業期間等	
卒業要件：3年間で93単位以上履修していること、かつ履修すべき全科目の評定が合格していること。 履修方法：必修科目は全科目を履修すること。選択必修科目は学則に定められた科目を履修すること。		1 学年の学期区分	2 期
		1 学期の授業期間	1 5 週

（留意事項）

- 1 一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち二以上の方法の併用により行う場合
- 2 企業等との連携については、実施要項の3（3）の要件に該当する授業科目について○を付すこと。